

よみがえれ! 海岸林

Vol.11

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。



トラクターで苗畑の整地を手伝う秋山キナさん(2012年3月1日)

ツト整備の手続き、給与計算などをしたが、細かい仕事ぶりに驚いたという。
今日はつきりしているのは、佐々木さんがいたからこそプロジェクトはうまく進んできたということだ。そのことを否定する人に会ったことはない。私自身、佐々木さんという人を得たことがこのプロジェクトの最大の幸運だった、と考えている。
しかし、だからといって再生の会が順風満帆にここまで歩んできたわけではない。
初期の段階ではAさんの「離脱」があった。震災で父と兄を亡くした彼が東京のオイスカ本部を訪れ、故郷の松林再生を懇願したことがオイスカと名取とのはじめての接点だ

「名取市海岸林再生の会」が生産する苗は全国的にも高く評価され、プロジェクトの順調な進展に大きく貢献した。震災を経た地元の人々の新しいコミュニティとしての役割も果たしている。その8年の歴史をたどると、人間同士、さまざまな問題を抱え、乗り越えてきたことも分かる。



左/種まきから1年半、苗の中で手入れをする再生の会の人々(2019年9月26日) 右/再生の会が育てた苗(上)はズングリ型(2018年10月7日)。ひよろつとした苗(2016年11月25日、福島県内)との違いは一目瞭然。

つたことはVol.4に書いた。Aさんはその後も故郷の恩師や同級生を通じてオイスカと名取を結びつける役割を果たした。そのころの写真の多くに彼の姿がある。「なぜオイスカは名取をプロジェクトの地に選んだのか」と聞かれれば、Aさんに触れずに答えることはできない。
いまAさんには連絡が取れないので確かなことは分からない。だから、一方的な書き方になってしまいかもしれないのだが、かつて故郷で金銭トラブルを抱えたこと、このプロジェクトも私利につなげようとする動きが認められたこと、などから、震災のあった2011(平成23)年末にオイスカの側から関係を断つよう求めたのだという。
「被災農家を雇用してその技術を生かす」。そんな基本方針にも難しさがひそんでいた。会員は、専業農家ではない人も、兼業農家だったり実家が農家だったり、ほとんどの人に農業体験がある。種まき一つとっても農業とは無縁だった自分が情けなくなるくらい手際がいいし、農機の運転、寒さよけ、風よけの覆い



宮城県内の種苗業者を招いてアドバイスを受ける佐々木廣一さん(左)(2012年10月23日)

づくりなども堂に入ったものだ。ただ、クロマツの苗を育てたことはだれにもなかった。クロマツの育苗サイクルは春の種まきに始まり、2年後の春の出荷で終わる。最初の年、2014(平成24)年は畑に直接タネをまいたが、2016(平成26)年にすべてコンテナポットを使うようになって手間は大幅に軽くなった。それでも、ピークには1年に10万粒のタネをまいた。施肥、水遣り、雑草取り、根の管理、防寒など日々の地道な作業がいい苗づくりには欠かせない。
佐々木さんも林野庁時代、苗づくりには直接携わっていなかった。しかし、苗畑を間近に見ていて、種苗家の知り

「苗半作」という言葉がある。苗の良し悪しで作柄が半ば決まるという意味で、稲作など農業の場で使われてきたようだが、「これは海岸の松林にも当てはまります」と講演などでつねづね強調しているのが、オイスカの吉田俊通海岸林担当部長(50/年齢は現在、以下同じ)だ。いい苗はプロジェクトのゆくえを左右する大切なポイントなのである。

「名取市海岸林再生の会」がクロマツの苗づくりを始め、2012(平成24)年春。5年後の2017(平成29)年には、生産した苗が宮城県内の「山林苗畑品評会」で最優秀賞を受賞し、全国レベルのコンクールでも農林水産大臣賞に次ぐ林野庁長官賞を受けた。プレハブの事務所には賞状が誇らしげに並んでいる。

林野庁で培った経験と誇りと

苗づくりを指揮したのは林野庁のOBで再生の会の事務局長を務める佐々木廣一さん(69)。作業の工程を考えて再生の会の会員に仕事を指示、

技術を指導することはもちろん、給与の支払い、経理、記録その他の事務作業も一手にこなした。オイスカが掲げた「被災農家を雇用し、その技術を生かして苗木づくりをする」というプランを実践するのがどんなに大変か、佐々木さんを見ているとよくわかる。会員の時給は近隣の相場より少し高めに設定し、しかも仕事の強弱によって三段階に分けた。作業中の事故にはとりわけ気を遣う。労災が起きればプロジェクト自体が頓挫しかねないからである。税務対策も必要だ。後払いでオイスカから支払われる経費の穴を埋めて当座の資金をつくるため、百万円単位を自分で立て替えたこともあった。

佐々木さんのベースには40年あまりの林野庁勤務がある。現場だけでなく労務管理なども担当したことで得た経験と誇り、それが再生の会の運営に反映している。筑波大学の学生だった秋山キナさん(29)は、震災の翌年にオイスカのインターンとして名取に住み込み、半年あまり佐々木さんを手伝った。指示と教育を受けながら、電話やインターネ

合いもいた。プロジェクトが始まると、宮城県内の先輩育苗業者に電話や実地でアドバイスを受けた。上にひよるひよる伸びず、太くずんぐりさせるための肥料のやりかた、寒さや乾燥を防ぐための孤の使い方など、細部にわたって教えを乞うた。コンテナを使った育苗は新しい技術なので、種苗業者に向けた研修会にも会員とともに出席した。

「人それぞれやりかたは違うから、こちらも工夫しなければならぬ。まねだけじゃだめで、こちらの現場に合うかどうかの研究も必要なんです」と佐々木さんは言う。

おれたちは「青空公務員」

そんななか、農家の人々の意見の違いも出てくる。たとえば、農家の人が「野菜の苗は農薬を説明書通りに薄めると効き目がいいから少し濃くすれば」と提案すると、佐々木さんは「マツの苗は野菜より弱い。説明書の通りにやってほしい」。つまりは、野菜とマツは同じか同じでないかという話である。

佐々木さんは自分の指示通りに作業を進めるよう求めた。結果を出すことにこだわったからである。それが林野庁OBとしての自分のミッションであり、寄付をしてくれる人への責任だとも考えた。一方、農家の人には「一人親方」気質がある。自らの発想や工夫も生かしたいと考えるし、佐々木さんの公務員流の仕事の進め方への反発も無いとは言えなかった。

会員にもさまざまな立場の人がいる。それによって支払われる給与の意味も変わってくる。もう年金で生活している人にはお小遣い以上のものになる。しかし、専業農家が本業を後回しにできるほどの額ではないし、永続的な収入が保証されるわけでもない。農家の人々が震災で失われた自らの本業再生を急ぐのは当然だろう。そういった人々がクロマツの苗づくりに手がかけられなくなっていく、ということも起きてきた。

インターンだった秋山さんは群馬県の農家の出身。佐々木さんの仕事ぶりに細かさだけでなく会員への気遣いも見えていたし、農家の人たちに呼



話からも感じられない。私が英雄さんと会った時、自宅の水槽にはいまも再生の会で働く友人と出かけて釣り上げたというウナギが泳いでいた。「再生の会はオイスカの下請けではない」。これが佐々木さんの口癖である。苗づくりと啓発普及に関してオイスカの委託を受けて活動する別団体だという話は前回も書いたが、このうち「啓発普及」について少し触れておこう。

啓発普及とは広報、PR活動である。震災からの復興に携わる地元の人々の存在を知ってもらうことは、プロジェクトの意義を語るうえで欠かせない。会員は各地での活動の報告、マスコミの取材への対応、行政の訪問などをこな

してきた。私は新聞記者時代にも、何人かの話を楽しく聞いた。その活動は、プロジェクトの資金源であるオイスカの寄付集めにもつながる。慣れないことが多く、「宣伝に使われるピエロみたいな気がした」という声もあるのだが、「プロジェクトのためだからね、喜んでやってたよ」と続く。活動の大切さは承知のうえなのである。

この3月19日、育苗場には再生の会の会員4人が出てきて、ことし播く6000粒ほどの準備をしていた。それぞれが避難所や仮設住宅での生活を体験、いまは住まいも落ち着いたが、ここが楽しいと口をそろえる。「普通なら傷つくようなこと平気で言って、



育苗場のプレハブの事務所で歓談(2020年3月19日)

- 1 企業で体験を語る大友淑子さん(2015年10月27日、東京で)
- 2 植樹祭参加者から寄付を集める(2016年5月21日)
- 3 名取市文化会館で行われた活動報告会では受付を担当(2014年2月22日)
- 4 メディアの取材に応じる(2019年7月20日)

☆次回は8-9月号に海岸での植えつけが始まりプロジェクトが軌道に乗り始めるころについて書く予定です

公益財団法人 東京都杉並区泉東2-17-5
オイスカ E-mail: kaiganrin@oisca.org
 〒168-0063 東京都杉並区泉東2-17-5
 ☎(03)3322-5161 ☎(03)3324-7111
 ■海岸林再生プロジェクト ホームページ
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>
 ブログは毎日更新中!

プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします!

■郵便局から(お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください)
 口座記号・番号.....00100-6-482316
 加入者名.....海岸林再生募金

■銀行から(お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください)
 銀行名.....三菱UFJ銀行 永福町支店(支店番号347)
 口座.....普通 0054080
 名義.....公益財団法人オイスカ(コウエキザイダンハウジンオイスカ)



ばれて畑作業を手伝ったり食事をご馳走になったりもしていた。「楽しかったです。ぎくしゃくしたことも含めて、人間関係が印象に残っている。佐々木さんにも農家の人にもプロ意識がありましたね」と振り返っている。

再生の会には、大きく分けて二つの地域の人々が参加している。津波で流された松林に近い北釜集落出身の人々と、数キロ内陸に入った地域の人々。内陸の人々が参加するきっかけを作ったのは杉ヶ袋北地区の大友英雄さん(71)。震災の年の9月、オイスカの説明を疑う空気が支配していた地元の集まりで「いいことなんだから。俺はやるよ」と声をあげ、場の空気を変えた人だ(Vol.8参照)。彼は近

所の人や町内会の役員仲間を数多く再生の会に誘い入れた。専業農家として、苗づくりでも育苗場の班長として中心的な役割を果たした。その大友さんが2015(平成27)年に再生の会を去った。昨年、ゆっくり話を聞く機会があったのだが、佐々木さんとの違いを「向こうは国家公務員、こっちは青空公務員だね」と言った。国に仕える身と自然に仕える身、その経歴の差とも言え換えればいいのか。

植え方もマツの将来の成長を大きく左右する。限られた適期に約8万本を植えるという膨大な作業量も考えると、結果を出すためにはプロの力が必要だったからである。その間の一日、名取市民ら350人を招いて植えつけをしてもらう植樹祭を開いたが、事前の指導だけでなく植えつけ後のプロのチェックも徹底した。大友さんには、苗づくりだけでなく植林もしてこそ「海岸林再生」という考えがあった。そうやって周囲の人たちを会に誘っていった。しかし、プロの植えつけの際も植樹祭のときも、再生の会は育苗場から海岸の植栽地に運ぶ「出荷」を担当し、苗を植える機会はほとんどなかった。「ここは再生の会がつくつ

た松林だ」という場所ではできなかったのである。大友さんが辞めた理由は、それが大きかった。

「やめてどうすんの。私は残る」

まとめ役を失い、杉ヶ袋北などの人たちは動揺した。その時に一役買ったのは、大友さんに誘われて入会した小中学校の同級生、同じ姓の大友淑子さん(71)である。「英雄ちゃんのと、ほんとはもつと辞める人増えてたんですよ。で、言ったの。せつかく立ち上げて二、三年で辞めてどうすんの。杉北(杉ヶ袋北)が笑われるんだよ。私は残るよ」と淑子さんはそのあとと英雄さんを訪ね、「私は辞め

ません。でも今後とも今まで通りのお付き合いをお願いします」と頼んだという。英雄さんも仲間を引き連れて辞めるような性格ではない。結局、英雄さん夫婦ともう一組、あわせて4人が退会したが、この時のわだかまりは英雄さんの話からも淑子さんの

- 1 苗づくりはコンテナへの土詰めから始まる(2014年4月4日)
- 2 種まきは簡単なようで難しい(2017年4月27日)
- 3 コンテナの中に生えた雑草取り(2015年10月6日)
- 4 播種後1年、コンテナを宙に浮かせて根の手入れを行う(2016年7月22日)
- 5 水遣りは手入れの基本だ(2019年1月30日)
- 6 育てた苗を束ねて出荷する(2017年4月17日)
- 7 休憩のひととき。雑談も大きな楽しみだ(2014年4月29日)